

「自己カテゴリー」の明瞭化過程における相対的自他比較 —「自己カテゴリー」の確立・変容における自己過程—¹⁾

吉原智恵子

我々は自己を知るために他者との比較を行っており、自己に関する知識を得るために類似した他者との比較を行うことは Festinger (1954) の社会的比較過程理論以来、繰り返し指摘されてきた。また自己を知ることはすなわち他者との相対的比較に基づいた、相対的自己評価を行うことでもある (Chen, Boucher, & Tapias, 2006; Mussweiler & Rüter, 2003; Mussweiler & Strack, 2000)。その結果として、同一の比較対象、同一次元、単一コンテキストにおける自他比較においてさえ、自己評価の同化・対比が同時に生じることがある (Birnat, Manis, & Kobrynowicz, 1997; Yoshihara, 1999)。

本稿では、このように自他比較によって確立され相対的に変容する自己過程における、自己カテゴリーへの帰属様式に注目する。

Mussweiler and Rüter (2003) は、このような社会的比較が日常の中で頻繁に行われており、その都度詳細な比較が行われるならば認知的処理の負荷が高くなりすぎるため、比較の対象を選択する際においても、また比較の過程それ自体においても、重要な他者 (例えば大学生であれば親友) との間でルーチン化された比較を行っていることを指摘している。さらに杉村 (2001) は、近年アイデンティティ概念のとらえ直しが生じており、アイデンティティの形成は他者との関係性における自他の視点の相互調整過程が重要であると指摘している。これはすなわち自己と重要他者との社会的比較過程にほかならない。

そこで本稿では、このように自他比較において確立、変容する自己過程について、社会的比較の比重が高まり他者との比較を頻繁に行っている大学生 (高田, 1999) を対象として検討する。特に自己カテゴリーとして重要であると仮定される2つの特性カテゴリーと、比較対象との関係性の違い、および自他比較における相対的な変動に注目し、各特性カテゴリーへ自己を帰属させる様相を明らかにすることを目的とする。

比較の次元と比較対象

Judd, James-Hawkins, Yzerbyt, and Kashima (2005) は、特性、集団、文化等のほとんどの社会的判断に2つの基礎次元があることを指摘している。うち1つはあたたかさに関わる次元であり、対人認知の領域では Asch (1946) による中心特性や、Rosenberg, Nelson, and Vivekananthan (1968) の社会的善良さ (social good/bad) の次元に対応している。このことは日常の多くの対人関係において、「あたたかい」かどうかという人物評価が重要な役割をもつことを示唆している。例えば、相手への接近・回避や関係性の継続・進展などが決定される際に有効な基礎情報となることが考えられる。つまり、人を「知る」上で「あたたかい」かどうかは重要な指標となっており、したがって自己を「知る」うえでも同様に重要な評価次元であり、重要な自己カテゴリーであると考えられるのではないだろうか (cf. 吉原, 2002)。一般に、人柄としてあたたかいと評価されることは社会的に望ましく、価値のある評価であるととらえられよう。このような社会的に価値のある自己カテゴリーとして、「あたたかい」という評価次元上において、自己は他者と比較してどのように認知されているのだろうか。

遠藤 (1997) は欧米における自己高揚動機と自己肯定的認知バイアスに対して、日本では夫婦や友人関係という関係性を単位とした関係性高揚動機と関係内での相対的自己卑下傾向が存在することを示している。この結果から考えると、あたたかいという社会的価値に対しても、親しい友人を自分より高く評価する関係性高揚動機と相対的自己卑下傾向が見られると予測することができるのではないだろうか。

一方、社会的価値とは独立に、各個人に重要な価値を付与している固有の特性カテゴリーについてはどうだろうか。自己を帰属させる自己カテゴリーとしては、社会的価値のある特性のほかに、個人的アイデンティティを表現し得る特性としての自己カテゴリーも重要であろう。この場合は社会的価値のある自己カテゴリーとは異なり、独自性としての価値を高く見積もる必要があるため、親しい人とも一線を画し、より自己に高く評価を与えることが予測できるのではないだろうか。

また、知人と比較する際の自己評価については以上と異なる背景・過程があると考えることができよう。親しい人との比較は定常的で安定した自己認知を与えるのに対して、知人との比較はより可変的な自己認知をもたらす可能性がある。そのため、自己防衛的な評価を行う可能性もあるのではないだろうか。

例えば田島 (2000) は、身近な事柄に対する態度の類似性判断では、一定程度

絶対的な判断が可能であるのに対して、身近でない事柄については判断が変動することを実験的に示している。身近な事柄に関わる態度については、当該の態度の自他比較が日常頻繁に行われていることから、態度の内的構造に自他の共通性をすでに見出していること、またその変域に慣れることで尺度が安定することを理由としてあげている。そうであるとすれば、日常的にルーチン化している親しい他者との比較 (Mussweiler & Rüter, 2003) は、ある程度安定した評価基準がすでに成立しているのに対して、知人との比較は生起頻度がより少なく、評価は偶然性に作用されがちであり、不確定的であることを予測できるように思われる。そのため知人との比較においては、自己評価を維持・高揚させる方向での評価が行われやすく、「あたたかさ」の自己カテゴリーについても、また独自に価値をおく自己カテゴリーについても自己評価をより高く行うことが考えられるのではないだろうか。

また、Pelham and Wachsmuth (1995) は、自己に対する評価が不確定的である場合には、親しい人との間で明確で詳細な社会的比較が生じ、他者を基準とする対比が生じるが、確定的に評価している場合にはヒューリスティックな比較が生じ、同化が生じることを指摘している。すなわち自他を比較する際に生じる同化・対比は、自己評価の不確定性と他者との親密さに依存するとしている。これを基に考えると、「あたたかさ」の自己カテゴリーが親しい人との間に安定した、確定的な自己評価をもつならば、自他比較において同化がみられることが予測される。しかし先に述べたように、親しい人との間で関係性高揚動機と自己卑下的評価が生じるのであれば、評価に差異が生じ、対比として測定されることもあり得るであろう。したがって、あたたかいという自己カテゴリーについて自他をどのように位置づけ、帰属させているかは明確に予測することが困難である。

一方、知人との比較では、どちらの自己カテゴリーについても確定的評価に基づく同化はみられず、評価の不確定性から明確な比較が生じるのであれば、対比として測定されることが考えられるが、Pelham and Wachsmuth (1995) の結果からは、知人という関係性にある他者との相対的自己の位置づけについての予測は困難である。そこで本研究では、以上を踏まえて、2つの主要な自己カテゴリーに関する自他の相対的比較・位置付けから、自己カテゴリーへの帰属の様相について明らかにすることを目的とする。

測定の手順

Birnat, Manis, and Kobryniewicz (1997) は自己-他者評価を比較する際の測定法について、測定順序と評価指標の違い、すなわち主観的評価か行動基準に

照らした客観的評価かの違いにより、同一比較対象、同一次元、単一コンテキストにおいてさえ同化・対比が同時に生じることを指摘している。また Yoshihara (1999) は、Birnat らと同様に測定順序と主観、客観の両指標を組み合わせ、宗教に対する自己の態度を親しい友人、知人、参照集団と比較する実験を行った。その結果、特に親しい友人との間で Birnat らと同様に同化・対比が同時により強く生じることを示している。したがって測定法に依拠して生じる自己認知の変動性と比較対象との関係性による自己評価の相対的変容もあわせて考慮しなければならないであろう。Birnat らは自己が評価の基準になることは自発的で自然な過程であるのに対して、他者が評価の基準になることはあまり使用されることのない方略であることを指摘している。本研究では、評価の順による自己カテゴリーの認知的変容についてもあわせて検討する（主観—客観指標による変容も同時に測定したが、本稿では省略する。）。

方法

実験参加者

実験参加者は日本福祉大学学生 209 名であった。欠損回答の多いものおよび中心特性の重要さ評価が 2 以下であるか、周辺特性より低いものを除き、有効回答者数は 188 名（男 143 名、女 45 名）となった。また平均年齢は 19.6 歳 (SD 0.95) であった。

質問紙の内容と手続き

自己と比較する相手として、親しい友人と知人の 2 群を、そして評価の順として自己先行、他者先行の 2 条件を設定し、 2×2 の計 4 条件の質問紙を回答者にランダムに配布した（2 回目の質問紙をほぼ 1 ヶ月後に実施することを予告し、継続データと符合させるために学籍番号の記入も求めた。本稿では 2 回目の質問紙に関する報告を省略する。）。

そしてまず自己と比較する相手として、親しい友人または知人のうち、ランダムに割り当てられた群にあてはまる人物を具体的にひとり選び、名前のイニシャルとつきあいの長さの回答を求めた。どちらの条件も同性の人物とした。なお、名前が分からない場合は回答欄にクエスチョンマークを記入するように教示した。

次に中心特性についての自己評価を求めるため、「あたたかい」—「冷たい」を両極に設定した 9 段階の SD 尺度を使用し、自他にあてはまる程度を測定した。その際自己評価と他者評価の順を操作し、自己先行条件と他者先行条件に半数ずつ

表1. 各自己カテゴリーの重要さ評価

	中心特性	周辺特性	自発的特性
MEAN	4.35	3.41	3.30
SD	0.63	0.83	1.18

ランダムにわりあて、自己と上記で挙げた他者の両者について順に評価を求めた。また中心特性との比較のため、Asch (1946) が使用した周辺特性の刺激語の中から価値的成分について相対的によりニュートラルな「夢想的」—「実際の」の刺激語を選び、中心特性と同様の測定を行った。さらに社会的価値とは独立な、自己にとって重要となる自己カテゴリーについての自他評価を行うため、自分自身をもっともよくあらわしていると思うパーソナリティ特性をひとつ記入するように求めた。これに続いて上記中心特性・周辺特性と同様に、回答された語（自発的特性自己カテゴリー）についての自他評価を求めた。但し自己についてはあてはまるのが前提になるため、SD 尺度中6から9までの4段階で回答を求めた。

次に、中心特性、周辺特性、自発的特性についての回答者自身の価値評価を確認するため、それぞれは自分のパーソナリティの中でどの程度重要なものであるかを5件法で測定した。さらに、行動指標を用いた客観的評価による自他評価と、自尊感情の測定も実施したが、本稿では紙数の都合によりこれに関わる報告を省略する。

結果と考察

自己カテゴリーの重要さ評価

各自己カテゴリーの重要さ評価について被験者内計画による分散分析を行ったところ、中心特性がそれ以外より有意に評価が高いことが明らかになった ($F(1, 164) = 114.55, p < .001$; 表1)。したがって「あたたかい」という評価については自己カテゴリーとしての価値の高さが認められたものの、自発的な自己カテゴリーについては周辺特性との有意差が得られず、自己カテゴリーとして十分に重要であるとの確認はできなかった。

各自己カテゴリーに対する自己評価と他者評価の比較、および測定順序の影響

親しい友人と知人に対する付き合いの長さは有意な差があり ($t(52.84) = 73.28$,

表 2. 自己評価が先行する場合の自他評価

		中心特性		周辺特性		自発的特性	
		親友群	知人群	親友群	知人群	親友群	知人群
自己評価	MEAN	5.84	5.64	4.87	4.33	7.45	7.02
	SD	2.10	1.48	2.35	1.66	1.45	1.39
他者評価	MEAN	6.29	5.62	5.71	5.33	5.03	5.12
	SD	1.97	1.59	2.32	1.71	2.32	1.99

表 3. 他者評価が先行する場合の自他評価

		中心特性		周辺特性		自発的特性	
		親友群	知人群	親友群	知人群	親友群	知人群
自己評価	MEAN	5.43	5.36	4.86	4.43	7.59	7.60
	SD	1.35	1.64	1.83	1.99	1.25	1.23
他者評価	MEAN	6.59	6.07	5.77	5.48	5.64	4.50
	SD	1.69	1.81	1.84	1.97	2.31	2.32

$p < .01$)、親しい友人のほうが有意に付き合いが長いことが確認された。このことから、これら2群間の親密さの違いを仮定できるであろう。

各自己カテゴリーに対する自己評価と他者評価を条件間で比較するため、関係性(親友群・知人群)×評価対象(自己・他者)の2要因混合計画による分散分析を行った。その結果、自己評価を先行する場合には周辺特性および自発的特性において評価対象の主効果が有意になり($F(1, 78) = 9.38, p < .01$; $F(1, 78) = 68.21, p < .01$)、周辺特性は他者評価が、また自発的特性については自己評価がそれぞれ有意に高く評価された(表2)。

一方他者評価を先行する場合には、自発的特性の自己カテゴリーにおいて交互作用が有意となり、自己に対する評価は親しい友人・知人のどちらと比較しても高く、また親しい友人に対する評価は知人に対する評価より高いことが示された($F(1, 84) = 3.94, p < .05$)。また中心特性、周辺特性についても評価対象の主効果が有意となり($F(1, 84) = 13.76, p < .01$; $F(1, 84) = 11.16, p < .001$)、ともに他者評価が自己評価より有意に高いことが示された(表3)。

以上から、自己評価/他者評価の順により、特に中心特性と自発的特性において評価の傾向が異なることが示唆されたといえよう。他者評価を先行する際には評価対象および評価内容による評価差がより明確に現れているように思われる。Birnat, Manis, and Kobrynowicz (1997) が指摘したように、自己を参照基準とすることが自発的で自然な過程であり、他者が評価基準になることはあまり使

用されない方略であるならば、他者が評価基準になることはより意識的で明確な比較過程が生じることとなり、そのため対比的な差異をもたらす評価が生じたのではないかと考えることもできよう (Pelham & Wachsmuth, 1995)。但しこの結果は個々の実験参加者の自他評価を対応させた分析によるものではなく、同化・対比については間接的な推測となる。また、自己評価／他者評価の順による違いがどのような機制によるものであるかは、今後さらに詳細に検討する必要があるが、以下では上記を仮定した上での考察を行う。

自己／他者どちらを先行して評価する場合にも、自発的特性は他者以上に自己を高く評価することが示された。自発的特性カテゴリーの重要性については十分な高さを確認することができなかったものの、親しい友人、知人以上に自己を高くあてはめて評価しており、この評価は比較の順序を越えて安定していることが明らかになったといえよう。また他者評価を先行する場合には関係性と評価対象との交互作用が見られ、親しい友人のほうが知人より高く評価されていたことから、自発的特性カテゴリーに関する意識的な比較下では、親しい友人との類似性を知人以上に認知していることが伺える。

中心特性の評価では、他者評価を先行し意識的な比較過程が存在する場合に親しい友人、知人ともに対比的に他者を自己より高く評価していた。さらに親しい友人の間には、遠藤 (1997) による関係性高揚動機と相対的自己卑下的評価が並存している可能性があるのに対して、知人に対しては関係性高揚動機に基づかない自己卑下的評価が生じている可能性がある。また、自己評価を先行する場合にはこのような差異は見られなかったことから、上述したように自己評価を先行して自己を比較の基準とすることが自然な認知過程の流れであり、「あたたかい」かどうかという判断が日常頻繁に行われるのであれば、よりヒューリスティックな判断による同化が生じ、得点間に差異が見られなかったのではないかと考えられよう。

周辺特性の評価では、自己／他者の評価の順および比較対象の関係性の違いにかかわらず他者評価が自己評価より有意に高く評価されていた。Pelham and Wachsmuth (1995) が指摘するように、周辺特性という不確定的な評価に対しては明確で詳細な社会的比較が生じ、他者を基準とする対比が生じやすいと考えられるのではないだろうか。これは自他評価の順を超えて一貫した結果が生じていたことも整合的な結果であると考えられよう。但しこの結果は、親しい友人との間だけでなく、知人との間にも同様の対比的評価が行われたことを示しており、この点において Pelham らと異なる結果が示されたといえよう。更なる検討が必要である。

表 4. 自己評価の相関

		自己評価先行		他者評価先行	
		(n=38)	(n=42)	(n=44)	(n=42)
		親友	知人	親友	知人
自己	中心特性	.109	.480**	.069	-.116
	周辺特性	.216	-.057	.032	-.060
	自発的特性	.238	.140	.052	-.124

** $p < .001$

次に Birnat, Manis, & Kobrynowicz (1997) と同様に、自己評価の相関を求めることにより同化／対比の傾向を調べた結果を表 4 に示す。自己／他者のどちらの評価を先行するかにより、特に中心特性について、知人に対する自己評価の相関が異なることが示された。自己評価を先行する場合に有意な正相関、つまり同化傾向が見られるが、他者評価を先行する場合にはそのような関係は見られなかった。Pelham and Wachsmuth (1995) の結果と異なり、本研究では親しい友人との間に同化は見られず、むしろ知人との間に同化が生じていた。評価の基礎として親しい友人に対する関係性高揚動機や相対的自己卑下傾向があるとすれば、単純に同化傾向が生じるものではないことは頷ける結果といえよう。その他有意な相関は見られなかったが、自己評価のどちらを先行するか、また比較対象の違いにより、正相関、無相関、逆相関のそれぞれの傾向が出現しているようにも見られるため、より明確な結果が得られるよう、さらに詳細に検討する必要がある。

総合考察

自己を帰属させる自己カテゴリーの確立には、重要他者とのルーチン化された比較と、一般他者としての知人との比較の双方が意味を持つことが考えられよう。また自己カテゴリーへの自己評価が確定的であるかどうか、さらに参照基準を自他のどちらに置くかによって社会的比較に基づく判断過程が異なり、自己の相対的な位置づけ・評価が変化すること、およびその変化のしやすさ（確立性）が異なることが示された。さらにこの自己評価の過程には、社会的価値をもつカテゴリーである場合に、関係性高揚動機や自己卑下的な評価がかかわっていることが推測された。今後さらに自己評価における判断の基礎過程をより詳細に検討し、以上の考察の妥当性を確認することが求められる。

注

- 1) 日本社会心理学会第44回大会(2003)において、本研究の一部を報告した。

引用文献

- Asch, S. E. (1946). Forming impressions of personality. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, *41*, 258-290.
- Birnat, M., Manis, M., & Kobrynowicz, D. (1997). Simultaneous assimilation and contrast effects in judgment of self and others. *Journal of Personality and Social Psychology*, *73*, 254-269.
- Chen, S., Boucher, H. C., & Tapias, M. P. (2006). The relational self revealed: Integrative conceptualization and implications for interpersonal life. *Psychological Bulletin*, *132*, 151-179.
- 遠藤由美 (1997). 親密な関係性における高揚と相対的自己卑下. *心理学研究* *68*, 387-395.
- Festinger, L. (1954). A theory of social comparison processes. *Human Relations*, *7*, 117-140.
- Judd, C. M., James-Hawkins, L., Yzerbyt, V., & Kashima, Y. (2005). Fundamental dimensions of social judgment: Understanding the relations between judgment of competence and warmth. *Journal of Personality and Social Psychology*, *89*, 899-913.
- Mussweiler, T., & Rüter, K. (2003). What friends are for! The use of routine standards in social comparison. *Journal of Personality and Social Psychology*, *85*, 467-481.
- Mussweiler, T. & Strack, F. (2000). The "relative self": informational and judgmental consequences of comparative self-evaluation. *Journal of Personality and Social Psychology*, *79*, 23-38.
- Pelham, B. W. & Wachsmuth, J. O. (1995). The waxing and waning of the social self: Assimilation and contrast in social comparison. *Journal of Personality and Social Psychology*, *69*, 825-838.
- Rosenberg, S., Nelson, C., & Vivekananthan, P. S. (1968). A multidimensional approach to the structure of personality impressions. *Journal of Personality and Social Psychology*, *9*, 283-294.
- 杉村和美 (2001). 関係性の観点から見た女子青年のアイデンティティ探求: 2年間の変化とその要因. *発達心理学研究* *12*, 87-98.
- 田島司 (2000). 態度の類似性の判断と対人魅力に及ぼす背景要因の対比効果—態度内容の身近さが与える影響. *心理学研究* *71*, 345-350.
- 高田利武 (1999). 日常事態における社会的比較と文化的自己観—横断資料による発達の検討—*実験社会心理学研究* *39*, 1, 1-15.
- 吉原智恵子 (2002). 自他の関係性と相対的比較について—自発的特性生成法を用いた測定に基づいて—*日本福祉大学情報社会科学論集* *5*, 1-6.
- Yoshihara, C. (1999). Relative comparison between self and close friend. *Proceedings of the 3rd Asian Association of Social Psychology*, 270-271.